SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

愛にイナズマ

2023年／日本映画
配給：東京テアトル／140分

2023（令和5）年11月1日鑑賞 | シネ・リーブル梅田

Data 2023−129

監督・脚本：石井裕也
出演：松岡茉優／窪田正孝／池松壮亮／若葉竜也／仲野太賀／趣里／高良健吾／MEGUMI／三浦貴大／芹澤興人／笠原秀幸／鶴見辰吾／北村有起哉／中野英雄／益岡徹／佐藤浩市

みどころ

この邦題を聞くと、私の世代なら誰でも、谷村新司作詞、堀内孝雄作曲の『冬の稲妻』（77年）と『君のひとみは10000ボルト』（78年）を思い出す。雷とイナズマ、そして恋は、よほど相性がいいのだろう。

石井裕也監督の『月』（23年）は貴重な問題提起作ながらも、メチャ重く、気分が暗くなる映画だったが、本作は大阪弁で言えば、“ケッタイな女”と“あかんたれ男”との“ぎこちない恋”を描くもの。それを支える重要な背景は、長い間疎遠になっていた父親と3人の兄弟妹の絆が、さまざまなきっかけによって復活、強化していくストーリーだ。

恋の成就についても、家族の絆の復活についても、雷とイナズマが大きな役割を果たすため、この邦題になったわけだが、ある意味、バカバカしいと思いつつ、父親の“散骨”に至るエンドへの展開はなんとも清々しい。これぞ石井演出！と思える見事な展開をしっかり味わいたい。

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——

■□■コロナ禍、“今撮るべき映画”を、電光石火に！■□■

私は、去る10月14日に石井裕也監督の『月』（23年）を見たが、その時点では、同作よりも10月27日から公開される本作の宣伝の方が多かった。『月』は石井監督の全力を傾注した問題提起作だったが、本作は2020年7月から始まった「コロナ禍」が2年目に入った2021年末頃に、“今撮るべき映画”とは何か？を考えて、“衝動的”に脚本を書き、“電光石火”に完成させた映画らしい。本作のパンフレットには石井監督のインタビューがあり、そこで彼は次のとおり語っている。すなわち、

> コロナ禍になって、誰もがとてつもない苦しみや悲しみを経験したはずなんです。お店を閉めた人もいるし、自ら命を絶った人も、散財した人もいます。一方でズルをしてもうけた

人もいるんでしょうが、総じて悲しかったり苦しかったりしたんだろうなと思います。屈辱や怒りや悔しさを感じた人もたくさんいると思います。例にもれず僕も企画がいくつか飛びましたし、映画は不要不急のものだと断定され、憤ったこともありました。それでも、やはり時間が経つに連れ、だんだんこういう気分が消えていくんですね。うやむやになっていくんです。“これは近いうちに（コロナ禍が）終わった後、なかったことにされるな”と、僕は確信に近い予感を持ちました。これが脚本を書いたきっかけです。

それはたまったもんじゃないぞと。本格的なコロナ後に、コロナを総括する作品や表現は出てくると思いますが、それよりもコロナの真っ最中・・・・・・渦中にあって、その渦中の感情と、“その後の”感情を描く作品があってもいいなと思いました。その時点でしか持ち得ない精一杯の希望は、きちんと表現しておいた方がいいと。それって今しか見出せない特別な希望だと思うし、同時にすごく強い希望になるんじゃないかと思ったので、それが“衝動”に繋がった。「今やりたい」というのがこの作品にはすごくありましたね。

その結果、監督自身のパーソナルな思いも投影しながら、本作の主人公は、映画監督を目指す女性・折村花子（松岡茉優）に！たしかに、本格的な「コロナ後にコロナを総括する映画」は今後登場してくるだろうが、本作では、アベノマスクの話題が面白おかしく紹介されるうえ、登場人物全員がマスク姿だから、本作の雰囲気はかなり異様だ。導入部に登場する、マスク姿で 1 人撮影を続ける花子の姿は“コロナ禍”なればこその異様な姿だが、青春時代の 3 年間を否応なくそんな姿で過ごさざるを得なかった花子の憤懣や怒りは如何ばかり！？ところが、そんな花子の憤懣や怒りは、制作費 1500 万円の新作に花子を監督として起用したプロデューサーの原麻衣（MEGUMI）や、助監督の荒川（三浦貴大）にとっては全く関係のないことらしい。これでは花子が脚本を書き、監督として初演出するべく日々心血を注いでいる新作『消えた女』の完成は、はるか遠くに・・・。

本作の脚本は衝動的に書いたものの、結局撮影中に第 78 稿まで改訂されたそうだが、『月』に込めた石井監督の問題意識とは全然違うものの、軽妙さ（軽薄さ）が目立つ（？）本作に込めた石井監督の思いをしっかり受け止めたい。

■□■一流の俳優を結集！これぞ“石井魔力”！■□■

私は本作の折村花子役で主演した女優・松岡茉優をよく知らないが、彼女は『万引き家族』（18 年）（『シネマ 42』10 頁）で日本アカデミー賞助演女優賞を受賞する等、注目を集めている若手女優だ。

本作冒頭、街のすべてがマスク姿になっている中、ビルの屋上から飛び降りようとしている男性を見た多くの野次馬がスマホのカメラを向ける中、「早くしろよ」と煽る“初老の男”を見た花子が、すかさずそこにカメラを向ける姿が登場する。せっかく撮ったのにカメラの不調で撮れていなかったという“オチ”（？）はあまりにお粗末だが、続く「プロローグ」では花子がプロデューサーの原、助監督の荒川と『消えた女』の脚本の打ち合わせ風景となる。そこでは、花子が前日に見た初老の男の話をするが、荒川から「そんなこと

はありえない」と一蹴され、さらに花子が「映画のモデルは失踪した母だ」というと、それについても荒川は「理由なく母が消えるわけがない」と、これまた一蹴。これには花子も“怒り心頭”だが、1500 万円出してもらっている以上、プロデューサーの原や原ご指名の助監督荒川の指示には従わなければ・・・。しかし、「そんなことはありえない」と言われても、花子は見たものは見たし、現実は現実だ。ところが、その数分後、荒川だけが戻ってきて「2 人でもう少し飲もう」と言われたから、アレレ。まさに映画製作の現場はセクハラの世界？冒頭に見る花子の熱演は相当なものだ。

他方、本作で舘正夫役を演じた窪田正孝は、『ある男』(22 年)（『シネマ 52』180 頁）で、日本アカデミー賞最優秀助演男優賞を受賞した俳優で、私も強く印象に残っている。本作は、そんな若手 2 人が主演するほか、折村家の長男・折村誠一役を池松壮亮が、次男・折村雄二役を若葉竜也が、3 人兄弟の父親・折村治役を佐藤浩市が演じているので、彼らの演技（力）に注目！本作には、このように一流の俳優が結集しているが、これぞまさに“石井魔力”！

■□■変な状況下で変なカップルが誕生！私には理解不能だが■□■

本作は章立てで構成されているから、前述した「プロローグ」に続いて、チャプター1「酒」、チャプター2「愛」の章で、花子が布マスクがトレードマーク（?）の男・舘正夫（窪田正孝）と相思相愛の仲になっていく姿が描かれる。2 人を橋渡しした（?）のは、正夫の同居中の親友で花子の作品に出演が決まっている俳優・落合壮太（仲野太賀）だが、バーのカウンターで偶然隣同士になった今ドキの若者（?）、正夫と花子が酒を酌み交わしながらお互いグイグイと惹かれていく姿は、74 歳の私には到底理解不能だ！

他方、その後に登場する、花子が監督として演出している映画『消えた女』の撮影は、いつの間にか監督が花子ではなく荒川に変わっていたから、アレレ。一体どうなったの？また、ある日、正夫が仕事から帰ると首吊り自殺を遂げている落合の姿を発見したから、アレレ。チャプター1「酒」、チャプター2「愛」の章では、石井監督が描く、そんな奇妙な若者たちの生態と映画作りの実態をしっかり観察したい。

■□■新企画では父兄が撮影対象！そこで浮上してくるのは？■□■

映画製作には金がかかる。しかし、そうは言っても、本作のプロローグを見れば、わずか 1500 万円の製作費で花子は『消えた女』の監督をしていたのだから、プロデューサーや助監督とのいざこざ（?）で花子が降板したとしても、「映画を撮るために使ってください」と叫ぶ正夫の金と、「負けない！」と叫ぶ花子の根性さえあれば、新たな『消えた女』の製作は可能！

そう決断した花子は今、正夫と共に東京から故郷に戻り、父親・治（佐藤浩市）が住む家の中にいた。そして今、花子のカメラの先には、父親の治の他、社長秘書をしている長男の誠一（池松壮亮）、カトリック教会で助任司祭をしている次男の雄二（若葉竜也）も加わっていたが、花子は一体何を撮影しているの？そこで正夫が驚いたのは、花子が父兄た

ちといる時の口の悪さ。東京で見た口数の少ない花子に比べると、まるで別人だ。もとより、演技経験のない治や誠一たちに対して、花子からは何の演技指導もなく、さらには役の説明もないまま、撮影のたびに、「こりゃダメだ！」と怒鳴られっぱなしだから、撮影現場はまるで親子喧嘩の修羅場だ。

正夫は滅茶苦茶言い合う家族の姿を見守るしかなかったが、そこで思わず誠一の口から暴露されたのが、治の病気のことだが、それを聞いた花子は？さらに、その夜の食卓では、治が今も母親の携帯の基本料金を払っていることを告白したから、アレレ。この家族は一体どうなっているの？治の病気のことを知らなかったのも、母親が海外に行ったとばかり思っていたのも花子だけだったとは・・・。

■□■5 人家族の絆（？）が海辺の海鮮料理店で復活！■□■

本作のチャプター4「家族」は、父親の治と 3 人の兄弟妹たちが互いに思いの丈をぶちまけあった挙句、これまで 1 度も使うことなく基本料金だけ払っていたという妻の携帯に治がはじめて架電するというシークエンスの中で、家族の絆（？）が浮上してくる。治は恐る恐る架電のボタンを押したものの、果たして電話口から妻の声が聞こえてくるの？そう思っていると、意外にも電話口には、佐々木と称する男が出てくることに。この佐々木の口からは、治の妻の美樹は 3 年前に死亡し、美樹の希望で浜辺から海に散骨したそうだ。電話を切った治は、佐々木は嘘をついているかもしれないと言ったが、嘘をついているのは佐々木ではなく治であることは誰の目にも明らかだ。

そんなチャプター4 に続く、チャプター5 のタイトルは「お金」だが、その舞台は海辺にある海鮮料理店。昔ここから、家族でフェリーに乗ったことを治以外は覚えていなかったが、店主の則夫（益岡徹）は、「治は永遠にタダ」と言いながら、4 人家族と正夫に対して豪勢な料理を提供してくれたが、それは一体なぜ？そこで則夫がベラベラと喋る話を聞いていると、はじめて、チャプター5 が「お金」と題されている理由がわかる。さらに、花子たち 3 人兄弟妹の父親である治は「何とすごい男なんだ！」ということがわかるので、則夫の話はここではネタバレ厳禁にしておこう。

もっとも、そこで則夫が調子に乗り過ぎたため、治の余命が 1 年であることがバレてしまったが、それはコトの成り行き上、仕方がない。そんな状況下、石井監督特有の漫画のような、あっと驚く展開が登場するので、そのバカバカしさ（？）も、あなた自身の目でしっかりと。

■□■雷と停電、そして家族のハグをどう総括？■□■

本作のタイトルは『愛にイナズマ』という刺激的な（？）ものになっている。しかし、変わりモノの女性映画監督・花子と、女にも仕事にも不器用なマスク男（？）正夫との恋は、『愛にイナズマ』と表現できるほどスマートでもなければ、カッコいいものでもない。むしろ、大阪弁で言えば、“ケッタイな女”と“あかんたれ男”との“ぎこちない恋”と表現した方が適切だ。ちなみに、チラシには「この出会い、1 億ボルト。」と書かれているが、

この表現と、この邦題を見れば、谷村新司世代の私としては、アリスのヒット曲である『冬の稲妻』（77 年）と、『君のひとみは 10000 ボルト』（78 年）を思い出さざるをえない。残念ながら、谷村新司は去る 10 月 8 日に亡くなったが、この両曲とも、作詞は谷村新司、作曲は堀内孝雄だ。

しかして、本作の邦題を考え、そして、本作のラストに向けて雷と停電の中で次第に盛り上がってくる家族がハグを重ねていく中で、正夫と花子の恋が成就していく姿を見ていると、本作（の恋）は、この両曲の世界観とピッタリ一致している。石井監督は 1983 年生まれだから、谷村新司、堀内孝雄世代ではないが、彼が本作を創作するについては、きっとアリスの前記 2 つの曲への強い想いや共感があったのだろう。これはあくまで私の勝手な推測だが・・・。

しかして、本作のチャプター6「神様」、チャプター7「雷」に見る、石井裕也監督流の、奇妙な 4 人家族のハグの姿と、正夫と花子の恋の成就の姿をあなたはどう総括？

2023（令和 5）年 11 月 14 日記

2024 年 4 月 3 日発売　『愛にイナズマ』
Blu-ray：¥5,200（税抜）
DVD：¥4,200（税抜）
発売・販売元：株式会社ハピネット・メディアマーケティング
© ©2023「愛にイナズマ」製作委員会